附属中学校におけるキャリア教育の検討

椋木香子（宮崎大学大学院教育学研究科）・盛満弥生（宮崎大学教育学部学校教育講座）
遠藤宏美（宮崎大学教育学部学校教育講座）・小林博典（宮崎大学教育学部学校教育講座）
藤本将人（宮崎大学教育学部社会科講座）・境泉洋（宮崎大学教育学部心理学講座）
安影亜紀（宮崎大学大学院教育学研究科）・竹内元（宮崎大学大学院教育学研究科）

Ⅰ はじめに

平成 11 年の中央教育審議会答申において、我が国で初めて「キャリア教育」という言葉が公的に登場して以降、学校現場では「キャリア教育」に関する様々な取り組みがなされてきた。優れた取り組みも多く見られるものの、学校現場では、「キャリア教育」が「食育」や「防災教育」のように新たに教育内容として追加されたものとして位置付けられたり、従来行われてきた進路指導との違いが明確でなかったり、組織体制の構築が難しかったりするなど、様々な課題を抱えている。

このような状況の中、宮崎大学教育学部附属中学校（以下、「附属中」と略記）では、昨年度より「総合的な学習の時間」を中心としたキャリア教育の取り組みを始めている。これは、附属中で取り組まれてきた教科教育での資質・能力の育成を基礎とし、生徒の自己実現と地域社会の人材育成の融合を目指す意欲的なカリキュラム開発となっている。昨年度は、本学部及び地域創成学部も協力し、自主研究公開も行われている。しかしながら、キャリア教育のカリキュラム開発段階で、教育学関係の研究者の立場からの検討は行われておらず、実践上の課題も多く見られる。

そこで今年度は、「総合的な学習の時間」を中心とした附属中でのキャリア教育のカリキュラム開発について、教育方法学やカリキュラム開発、学校・学級経営、臨床心理等の立場から検討を行い、附属中が課題としている他教科・他領域との連携も含めた共同研究をスタートさせた。長期的には、小中一貫したキャリア教育の展望も視野に研究を進めている。

今年度の研究では、まず昨年度から実施されている附属中でのキャリア教育について、総合的な検討・分析を行った。その際、附属中の校長及び中心的な担当者も共に協議に参加し、附属中のキャリア教育の特質と課題について検討し、学会発表や論文執筆、フォーラムでの実践報告などを行った。本論では、学部重点経費（教育研究経費）採用後の附属中との共同研究の概要と、その結果明らかとなった附属中のキャリア教育の特質と課題について報告する。

Ⅱ 附属中との共同研究の概要

附属中では上述のように、昨年度から本格的にキャリア教育に取り組んでいるが、共同研究に向けての事前ヒアリングにおいて、附属中の山下辰弥校長及び担当者である鬼塚拓教諭がいくつか課題を感じていることが分かった。一つには、他教科との連携であり、もう一つは継続可能性である。前者については、キャリア教育の推進において一般的に課題として指摘されることであり、この点についての検討は一つの研究視点となると思われた。一方、後者については、附属中の特殊事情による。今回の附属中のキャリア教育は後述するように、「附属中だからできる」というような内容となっている。また、担当の鬼塚教諭が独自の視点で研究を深めて実施している部分があり、鬼塚教諭がいなければ継続できない可能性があった。しかし、附属中のキャリア教育は大変質の高いものであり、カリキュラム編成上の特質を明らかにすることができれば、宮崎県内のキャリア教育の推進に大きく貢献できるものであると考えられた。

そこで本研究では、附属中の課題も踏まえ、附属中のキャリア教育の特質を明らかにし、そ

のカリキュラム編成上の特質を検討することとした。そのためにまず、附属中のキャリア教育の全体像を共同研究のメンバー全員で共有・考察した上で、附属中で行われる公開研究会等に参加し、共に実践を検討・分析し、その結果を学会・論文等で公表することとした。共同研究の全体は以下の表の通りである。

	日程	内容	概要
1	7月26日	事前ヒアリング	山下校長、鬼塚教諭に椋木がヒアリング
2	8月26日	第1回研究会	附属中によるキャリア教育実践の説明及び研究の方向性の検討・研究課題の明確化
3	10月4日	附属中「総合的な学習の時間」研究発表会	生徒（3年生）の研究発表会 審査委員として椋木・竹内・藤本・安影が参加 発表会後、鬼塚教諭を交えて実践の考察
4	10月21日	附属中「総合的な学習の時間」公開研究会	公開研究会に椋木・竹内・遠藤・藤本・安影が参加
5	11月5日	第2回研究会	日本キャリア教育学会発表内容の検討
6	11月9・10日	日本キャリア教育学会発表	竹内、盛満、山下校長、鬼塚教諭参加・発表
7	12月1日	附属中探究学習発表会	宮崎大学３３０記念交流会館コンベンションホールにて、10月4日の研究発表会の優秀者の探究学習の内容を発表
8	1月6日	第3回研究会	教育協働開発センター紀要への投稿論文の検討
9	1月	研究論文投稿	教育協働開発センター紀要への論文を投稿
10	2月20日	みやざき教育フォーラム	キャリア教育がテーマのフォーラムで附属中の実践を先進事例として報告（鬼塚教諭）

Ⅲ　附属中のキャリア教育実践の特質と課題

ここでは、2020年1月に投稿した教育協働開発センター紀要論文を基に、附属中のキャリア教育の概要、特質、課題について報告する。

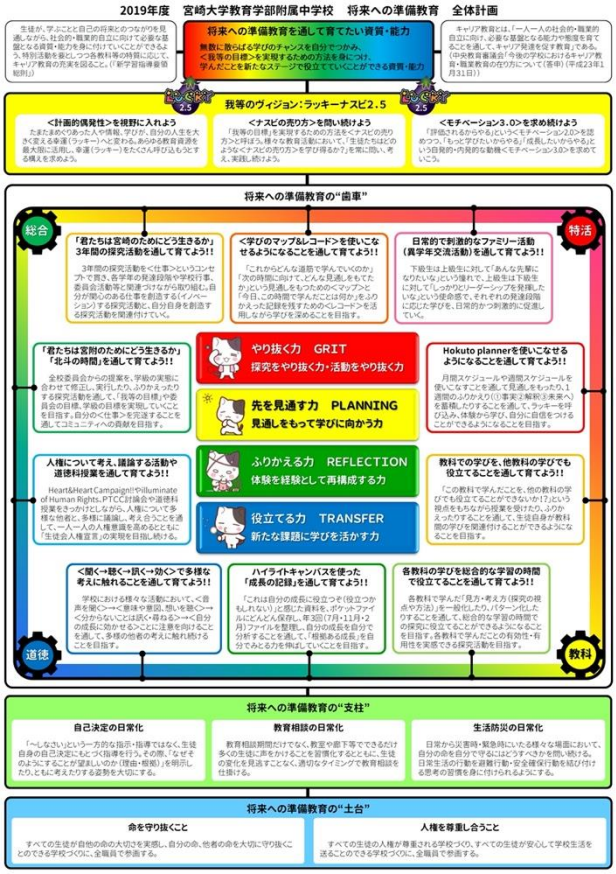
1　附属中のキャリア教育の概要

附属中では、キャリア教育を「将来への準備教育」と位置付け、学校の教育活動全体で取り組むために、総合的な学習の時間を中核とした全体計画を作成している。まず、「将来への準備教育全体計画」（図1）にあるように、「将来への準備教育を通して育みたい資質・能力」を設定し、その実現のために、「我等のヴィジョン：ラッキーナスビ2.5」を設定している。これは、将来への準備教育の鍵となる3つの概念を一体化して表現したものであり、「ラッキー」「ナスビ」「2.5」にそれぞれ教師の想いやねらいが込められている。

このヴィジョンに基づき、「将来への準備教育の“歯車”」として、総合的な学習の時間、特別活動、道徳、各教科を位置付け、「やり抜く力　GRIT」「先を見通す力　PLANNING」「ふりかえる力 REFLECTION」「役立てる力 TRANSFER」を育てようとしている。図1にあるように、附属中では、異学年交流や保護者参加の人権教育、月刊・週間スケジュール帳である「Hokuto planner」の活用など、多種多様な教育活動を行なっているが、それらを全てキャリア教育に位置付けて全体計画を策定している。

さらに、附属中のキャリア教育の中核となっている「総合的な学習の時間の全体計画」（「将来への準備教育としての総合的な学習の時間の全体計画」）（図２）が策定されており、上述の「やり抜く力 GRIT」「先を見通す力　PLANNING」「ふりかえる力 REFLECTION」「役立てる力 TRANSFER」が、「将来への準備教育を通して育みたい資質・能力」の具体的な４つの観点として示され、整理されている。これらの資質・能力を育むため、「社会と若者の現状」や「宮大附属中の現状」を踏まえ、附属中の「総合的な学習の時間」のコンセプト「君たちは宮崎のためにどう生きるか」が設定されている。このようなコンセプトを実現するために、「＜３年間を通した探究活動＞への確かな見通し」「＜各教科の見方・考え方＞を中核とした授業」「＜共通のフレームワーク＞を用いた創造的活動」を全職員で共通理解し、取り組むこととしている。その上で、各学年の目標と内容が整理され、３年間で系統性を持った指導に学校全体で取り組む計画が策定されている。

第１学年では「自分の仕事を完遂せよ!!」をテーマに、生徒たちは自分たちの委員会活動（仕事）を通してどのような価値を提案していくべきかを考える。協働しながら考えたアイデアを実行し、定期的に振り返り、アイデアを修正していくというサイクルを繰り返しながら、「仕事とは何か」「仕事をするうえで大切にすべきことは何か」等について探究していく。第２学年では「今ある仕事を分析せよ!!」をテーマに、学校内から学校外へと探究の場を移行させながら、職場体験や修学旅行自主研修を通して「仕事を分析する方法」を身に付ける探究活動に取り組む。第３学年では「新たな仕事を創造せよ!!」をテーマに、自分自身も含めた宮崎で生きる人たちの隠れたニーズを探り、それに応えるための仕事を創造していく探究活動に取り組む。この探究活動は、同時に、その仕事を実現するために自分にどんな学びや成長が必要かを見つける、自分自身を「創造」していく



〔図１　将来への準備教育全体計画〕



〔図２　総合的な学習の時間の全体計画〕

探究活動ともなっている。宮崎の人たちの隠れたニーズを探りながら、自分が将来やってみたい仕事を創造する」という探究活動を通して、「将来、こんな仕事を創造するために、私はこの上級学校を志望したい」という進学動機や「私は中学校時代、こんな活動に取り組み、こんなことを学んできた」という学びの軌跡を語り得る経験を培うのである。

２　附属中のキャリア教育の特質

（１）職業観・勤労観を見直す職場体験学習

宮大附属中では、キャリア教育の代名詞とも言われてきた職場体験学習を、仕事を分析・創造する方法を学ぶ機会として再構築している。

これまでの職場体験学習では、生徒の希望を重視して体験先を割り振るため、第一希望にならなかった生徒の意欲が低くなったり、学校が受け入れ事業所に負担をかけまいとして、「とにかく何でもいいので体験を」と受入事業所に頼んでしまい、生徒の学びに差が出てしまったりしていた。また、職場体験学習のマンネリ化・消化行事化などの声が聞かれるようになっている。

宮崎県キャリア教育支援センターは、こうした事態を受けて、業態を体験させることを主眼とする職場体験学習から、職場体験学習を受け入れている事業所の社会的価値や顧客獲得戦略など発見したり体験したりすることができるような、発見型職場体験学習への転換を提唱している。というのも、今後、社会や仕事の業態が急変すると予想されるなか、多くの業態が今のそれとはまったく違った形になっていくことを前提とするならば、「現在の仕事・業態を体験させるだけ」の学習では、そこでの学びを将来に向けて汎化させていくことは難しいのではないかと考えられる。むしろ、当該事業所の社会的価値や顧客獲得への戦略など、業態が変わろうとも各企業が存在し続けるための「価値」や「新たな価値創出戦略」などを、生徒たちに学び取らせる必要があるのではないかというのである。

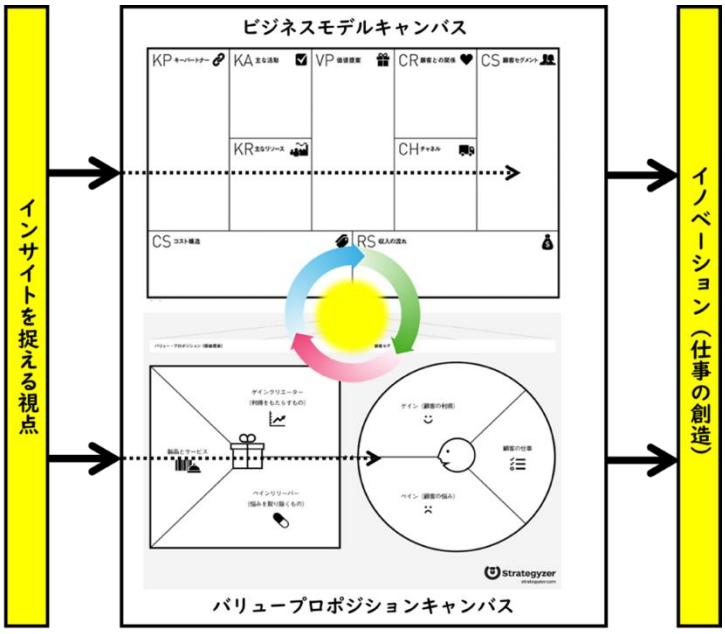
附属中では、こうした社会や仕事の業態が急変する事態を「これからの社会では、新しい仕事を創り出せる割合がどんどん増えていく」と前向きにとらえ、生徒に「仕事がなくなる」と焦らせるのではなく、「自分たちで仕事を創り出すことができる」と将来に希望を持たせようとしている。附属中では、職場体験先の希望を生徒から取らないが、それは与えられた条件のもとで最高のパフォーマンスを発揮するよう、自分自身の潜在能力を選択的に開花させることが重要であると考えるからである。

その際、職場体験学習を単なる体験学習に終わらせないために、事前学習として、仕事を分析する方法を生徒は学習していく。実際にビジネスで活用されている＜ビジネスモデルキャンバス＞と＜バリュープロポジションキャンバス＞を使って、どんな人たちのために、どんな価値を提供しているのかをより詳細に考えた上で、分析内容に基づいて体験先での質問を整理するとともに、自分の職業観・勤労観を表出させている。事後学習では、体験したことを整理し、＜ビジネスモデルキャンバス＞と＜バリュープロポジションキャンバス＞をつくり直し、学校生活のなかで学んでいることを、職場でどのように生かすことができたかをまとめるとともに、職場で学んだことを、これからの学校生活のなかでどのように活かすことができるかを考えた上で、自分の職業観・勤労観を見直すのである。附属中の職場体験学習は、仕事を分析し価値や戦略を学んでくるだけでなく、生徒が自己の職業観・勤労観を見直すプロセスとして職場体験学習を位置づけている点に第一の特質がある。

（２）探究としてのキャリア教育

附属中ではこれまで、「あなたの夢はなに？」といった夢追い的なキャリア教育が行われていた。附属中が自校のキャリア教育を転換するにあたってとらえていた課題は２つある。１つは、学年間の探究活動のつながりの弱さであり、もう１つは、＜社会についての探究＞と＜自己に

ついての探究＞の断絶である。これらの課題を乗り越えるため、附属中では、＜仕事＞という視点で３年間の探究活動を貫き、「総合的な学習の時間」を軸に、教育課程全体を再構築してきた。＜仕事＞という視点から貫かれた「総合的な学習の時間」では、生徒たちは仕事を創造する視点と枠組みを学んでいく。具体的に言えば、＜インサイト＞（潜在的ニーズ）という視点から、＜ビジネスモデルキャンバス＞と＜バリュープロポジションキャンバス＞という枠組みを駆使し、＜イノベーション＞（仕事の創造）を探究していくのである（図３）。ここに探究学習としての附属中のキャリア教育の特質がある。



〔図３　仕事の創造の探究のプロセス〕

（３）将来展望を社会参画につなげるキャリア教育

附属中のキャリア教育実践は、「君たちは宮崎のためにどう生きるか」をコンセプトにした「総合的な学習の時間」を軸に、生徒たちがイメージしやすい３年間のストーリーをつくり、学校全体の教育課程を改善してきたものである。その際、「宮崎をどうしたいか」ではなく、「宮崎の人のために何ができるか」を考えることを通して、宮崎に生きる多様なニーズをもった人たちを発見していくことが強調されている。生徒たちが「宮崎にこんな提案をします」で終わるのではなく、「その提案を、将来、私が実現します」「そのための自分のキャリア形成を考えます」へとつなぎ、「社会について考えること」と「自分について考えること」が接続できるような探究活動を創ろうとしている。

３年生は、探究活動のまとめとして、「研究論文づくり」だけでなく「絵本づくり」にも取り組む。絵本というメディアで、自分自身を主人公にした物語をつくることを通して、メタ認知を促進し、自分を客観的に見つめ、自分自身を語る。絵本では、生徒たちが創造した仕事のアイデアとともに、どのような探究プロセスを経て、自分自身がどのように変容してきたのかが語られる。そして、絵本の「あとがき」に探究活動全体の振り返りがまとめられる。研究論文でも、問題・分析・創造という章立てに加え、「はじめに」と「おわりに」のある研究レポートづくりとなっており、自己の創造と仕事の創造を往還させていくという二重構造の実践になっている。地域の課題に向き合うことを通して自己実現を目指すのではなく、自己実現を軸に地域の課題を自分なりに見出していく営みである。このことが、探究活動における当事者性を高めることにつながっていく。

３　附属中におけるキャリア教育の課題

キャリア教育は、「子どもたちの学校卒業後の社会生活や職業生活との関連性を意識した視点から、学校の教育課程全体を再点検し、必要な編み直しを行っていく営みである」[1)]というように、教育課程を改善していくものである。改善の視点として、学習指導・生徒指導・進路指導を相互に結び付ける結節点にキャリア教育が位置づき、学校全体としてのキャリア教育に位置づけているか、「職場」体験だけではなく、自然体験や社会体験、文化理解といったテーマ学習が学年縦断的に取り組まれているか等がすでに提案されている[2)]。附属中におけるキャ

リア教育を視点としたカリキュラム改善は、現在進行中である。附属中においては、「将来への準備教育」として、キャリア教育と生徒指導との結びつきは意識されているが、各教科の学習との結びつきが課題となっている。職員研修においても、複数回にわたって、各学年のカリキュラムを「キャリア教育」や「総合的な学習の時間」の視点から再確認し、各教科の学習がどのように接続できるかを考え合うワークショップを実施し、各教科と「総合的な学習の時間」との関連を可視化するという試みも行ってきた。

しかしながら、附属中におけるキャリア教育には、大きく２つの課題がある。１つは、人権教育カリキュラムの改善である。３年間を通した「総合的な学習の時間」のカリキュラムにおいて＜インサイト＞という視点が重視されている。この視点を重視するのであれば、たとえば、差別や排除によって人権が脅かされている現実を学び、それらの課題を乗り越えるために必要な視点を身に付けていくことができるならば、一人ひとりを人間としての価値において対等に扱いつつ、一人ひとりは個性をもった二つとしてない存在であるというインクルーシブの感覚を養い、ダイバーシティを尊重した社会の形成に参画していくことにつながっていくことができる。3 年間を通した人権教育のカリキュラムを整理し、キャリア教育との関連性を明確にしていくことが求められる。

もう１つの課題は、特別活動のカリキュラム改善である。附属中の「総合的な学習の時間」は、探究的な委員会活動を含んだかたちでカリキュラムが構成されている。しかしながら、「総合的な学習の時間」だけでこのような取り組みを充実させることは困難である。「総合的な学習の時間」で環境改善のアイデアを探究し、特別活動においてそのアイデアを実現させ、検証し、さらなる改善を図ることでより良い集団づくりを目指していくような結びつきを、カリキュラムレベルで構築していくことが求められる。

Ⅳ おわりに

本研究では、附属中のキャリア教育の概要を示した上で、職場体験学習としての特質と探究学習といての特質を明らかにすることを通して、附属中におけるキャリア教育実践の特質と課題を検討してきた。附属中では、職場体験学習の捉え直しや探究学習としてのキャリア教育を通して、特定の仕事について学習させるのではなく、様々な仕事に共通する考え方や態度などを育成している。また、生徒たちに仕事を「創造」させることで、当事者意識を持った職業人・社会人の育成を図っていると考えられる。

一方で、仕事分析に関する二つのツールや仕事の創造に関する諸概念は複雑であり、附属中の実践が他校でも同じように実践可能とは考えにくい。中学校でのキャリア教育の重要な要素・ポイントは何かについて、もっと詳細な検討が必要である。また、上述のように、キャリア教育を視点とした学校の教育課程全体のカリキュラム改善も今後の継続課題である。

もう一つの研究視点として、今年度の附属中のキャリア教育実践が生徒たちにどのような影響があったかを分析することが可能である。生徒が作成した研究論文や絵本を分析することで、中学生におけるキャリア発達について、何らかの示唆が得られる可能性がある。来年度以降の研究の課題としたい。また、小中一貫したキャリア教育の構築も引き続き視野に入れて、研究を行っていく。

注・参考文献

1）児美川孝一郎（2007）『権利としてのキャリア教育』明石書店、p. 13-14。
2）児美川孝一郎（2013）『キャリア教育のウソ』筑摩書房、p. 99-110、参照。